

# 工業高校における生徒の自己概念と職業に対する自己効力感との関連性 — 3年生の知見を踏まえた1・2年生への調査から —

大分大学教育福祉科学部 ○島田和典  
大阪市立泉尾工業高等学校 山尾英一  
兵庫教育大学大学院学校教育研究科 森山 潤

## 1. はじめに

本研究の目的は、工業高校における生徒(以下、工業高校生とする)の形成する自己概念と職業に対する自己効力感との関連性を検討することである。

### 1.1 自己概念と職業に対する自己効力感

近年、産業構造の変化や高学歴志向の中で、工業高校にも変革が求められている。一方、不本意入学や中途退学者の問題等、工業高校での学校生活に十全に参加できない生徒の存在が大きな課題となっている。その原因の一つとして、生徒が工業高校に学んでいる現実の自己像を適切に将来の自己像と結び付けられていないことがあげられる。このような自己像、すなわち生徒が自分自身をどのように捉えているかという認識は自己概念(Self- Concept)と呼ばれている。筆者らはこれまで、工業高校生の自己概念が、F1 自律志向性、F2 キャリア志向性、F3 専門的能力志向性、F4 社会的価値志向性、F5 自己モニタ志向性の5因子によって構造化されていることを明らかにしている<sup>1)</sup>。この自己概念について Super(1963)は、青年期の職業に対する興味・関心、考え方や職業選択等を通じて、職業的自己概念が形成されることを指摘している。浦上(1996)は、進路選択過程に対する自己効力感が高いことは、進路探索意図や進路探索行動を促進し、また、これらの意識と自己概念との間には密接な関連性があることを述べている。

これらのことから、工業高校において形成される自己概念と職業に対する自己効力感の間には、関連性のあることが予測できる。筆者らは既報において、工業高校生の職業に対する自己効力感を、Bandura (1977)の定義に基づき、「将来の自己の職業生活を適切に営めそうであると感じる遂行可能性の認知」とし、工業高校生への調査を通して、生徒の自己効力感が、F1 適応資質効力感、F2 専門性効力感の2因子で構成されていることを明らかにしている<sup>2)</sup>。

## 1.2 先行研究の状況と本研究の位置づけ

卒業後に就職を目指す生徒が多い工業高校において、進路指導は入学時より卒業段階まで系統的に行われることが望まれる。特に、眼前の職業選択を控えた3年生においては、様々なイベントによる生徒への支援・指導が活発化する。このような状況を踏まえ、前報(2014)では、職業選択が眼前に迫った3年生を対象に、自己概念の自己効力感に対する影響力を検討した<sup>3)</sup>。その結果、自己概念の自律志向性や専門的能力志向性が自己効力感に比較的強い影響力を示し、工業高校生としての自己概念形成の果たす役割が認められた。一方、本来、進路実現時に最も重要と考えられるキャリア志向性や自己モニタ志向性の影響力が相対的に弱い傾向にあることが示され、学校生活の中で培ってきた自己像の振り返りに基づくキャリアへの展望が、将来の職業に対する自信と適切に結び付けられていない実態が把握された。同時に、これらの傾向は3年生という限定的であり、1・2年生の状況は把握ができていない状況である。

そこで本研究では、前報の結果を踏まえ、1・2年生について同様の分析を行い、その状況を把握することとした。

## 2. 方法

**調査対象：**平成24年度に入学した大阪府、鳥取県の工業高校生361名。

**手続き：**調査は、1年生学年末の平成25年2月～3月及び、2年生学年末の平成26年2月～3月に、山尾らの作成した「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度(2010)」及び島田らの作成した「工業高校生の自己概念尺度(2007)」を5件法実施した。

調査後、自己概念の形成状況によって上位群・下位群に分類し、職業に対する自己効力感の得点を確認した。その上で、1・2年生の自己概念が、職業に対する自己効力感に与える影響を検討した。

### 3. 結果と考察

調査の結果、有効回答は361名中337名、有効回答率93.4%となった。

#### 3.1 自己概念の形成状況による職業に対する自己効力感の差異

分析にあたり、1年次の学年末段階の自己概念について、対象者それぞれにおける自己概念を構成する5因子の因子別平均値を合計し、自己概念全体の値を算出した(この算出方法は筆者らの先行研究<sup>4)</sup>による)。この得点が満点25点に対し、1年次が平均値16.99(S.D. 2.71)、2年次が平均値16.93(S.D. 2.57)であったことを考慮し、学年ごとに平均値以上を自己概念上位群(1年:n=171, 2年:n=163)、平均値未満を下位群(1年:n=166, 2年:n=174)と設定した。その上で、自己概念上位群・下位群それぞれの自己効力感の尺度得点を集計し、分散分析を実施した。その結果、いずれの因子においても上位群が下位群より高い自己効力感を形成している傾向が認められた。

これらのことから、個々の生徒の自己効力感の背後では、自己概念の形成状況が影響している可能性が指摘できる。これは、前報の3年次の知見のみならず、1・2年次についても同様の傾向であったことを意味している。

#### 3.2 自己概念5因子が職業に対する自己効力感に与える影響

具体的な影響力を検討するため、1・2年生ごとに、自己効力感の尺度得点を基準変数、自己概念5因子の尺度得点を説明変数とする重回帰分析を実施した。その結果、有意な重相関係数(R=0.668~0.769, p<0.01)が得られ、影響力が認められた(表1)。影響力を示す標準偏回帰係数について、0.20以上を基準に検討した結果、1年次

では、F1自律志向性、F3専門的能力志向性が、2年次では、1年時の影響要因に加え、F5自己モニタ志向性の適応資質効力感に対する影響力が認められた。この適応資質効力感因子は、社会的環境に適応するために必要な基礎的資質の形成による効力感を意味している。2年次において、自己を顧みるような意識が、本因子の形成の促進につながる可能性が認められた。

前報の3年次の知見を加えると、自己モニタ志向性の影響力は相対的に2年次が最も強い傾向にある。また、3学年を通してキャリア志向性の影響力が弱まっていく点もあげられる。これらのことから、1年次から3年次へと系統的な進路指導、かつ適時的な支援の必要性が考えられる。

### 4. まとめと課題

以上本研究では、工業高校生の自己概念と職業に対する自己効力感を検討し、両者の関連性が学年によって異なる知見が得られた。今後は、具体的な進路指導の場面において、本知見を踏まえた手立ての検討が必要であると考え。

#### [文献]

- 1) Shimada, K., Moriyama, J., Matsuura, M.: The structure of students' self-concepts in industrial high school, *International Journal of Technology and Design Education*, 17(1), pp.45-54, 2007
- 2) 山尾英一, 森山潤: 工業高校生の職業に対する自己効力感の実態分析, 日本産業技術教育学会誌, 5(3), pp.169-176, 2010
- 3) 山尾英一, 島田和典, 逸見正, 森山潤: 工業高校における生徒の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響, 日本産業技術教育学会第57回全国大会(熊本)講演要旨集 p.5, 2014
- 4) 島田和典, 森山潤, 工業高校生の自己概念の変容・形成過程の縦断的事例検討, 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 34(2), pp.207-222, 2012

表1 工業高校生の自己概念が職業に対する自己効力感に与える影響

職業に対する 自己効力感	自己概念(説明変数)の標準偏回帰係数					重相関 係数	F値 df(5, 331)
	F1	F2	F3	F4	F5		
	自律志向	キャリア	専門能力	社会価値観	自己モニタ		
1年生							
F1適応資質効力感	0.40**	0.19**	0.15**	0.13**	0.19**	0.769	95.70**
F2専門性効力感	0.26**	0.14**	0.23**	0.19**	0.10*	0.668	53.30**
N=337						**p.<.01, *p.<.05	
2年生							
F1適応資質効力感	0.47**	0.12**	0.14**	0.11*	0.21**	0.764	92.87**
F2専門性効力感	0.29**	0.09*	0.30**	0.19**	0.15**	0.721	71.71**
N=337						**p.<.01, *p.<.05	